

世界最大の二枚貝 (シャコガイ)

石材のないサンゴ島では、木材の加工に欠かせなかったのが貝斧。この材料となる巨大なシャコガイは、地味な貝殻に似合わぬ鮮やかな外套膜で人を引きつける



海中で口を開いたシャコガイ。外套膜を太陽光にあてて共生藻の光合成を助ける(沖縄県石垣島にて) (撮影:佐伯信雄)



ボッティチェリ作「ヴィーナスの誕生」(部分)。足下の大きな二枚貝はヨーロッパホタテガイ(イタヤガイ)

大きな二枚貝という点、「ヴィーナスの誕生」という絵を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。ルネッサンス期イタリアのボッティチェリの作品だ。
私は長らくこの貝はシャコガイだと思ってきた。とくに、オオシャコガイは殻長が一・四メートルを越えるものもあり、世界最大級の二枚貝だからだ。

しかし、描かれた貝をよく見ると、放射状の線の数が多くて角張っている。これはホタテガイの特徴であって、シャコガイではない。しかも、地中海にはホタテガイは生息していないが、シャコガイは生息していないので、画家によるサイズの誇張だろう。思い込みとは恐ろしい……。
じつをいうと、シャコガイという貝はいない。分類学的には、シャコガイ科に属す貝の総称にあたる。大きな貝に似合わず、浅い海に広がるサンゴ礁のあいだで成長する。
調査の合間に海に入ると、まるでお花畑のようにカラフルな彩りを誇示しているのがシャコガイだ。青系、緑系、紫系など色とりどりで、これは貝そのものの色ではなく、貝殻からはみ出すようにフチを彩っている外套膜の色である。
この外套膜の中には共生藻がおり、それが光合成をして作り出す栄養をうけとることで、シャコガイは他の

シャコガイ *Tridacnidae*

シャコガイは、シャコガイ科に属する二枚貝の総称で、2属8種類を含む。インド洋から太平洋の熱帯～亜熱帯海域にかけての珊瑚礁の比較的浅い海に生息する。二枚貝で最大のオオシャコガイは、長さ1.4m、重さ200kgを越すものもある。外套膜には渦鞭毛藻類の褐虫藻が共生しており、これがおこなう光合成によって海水中の二酸化炭素やカルシウムを取り込むことで、厚い貝殻が形成される。

貝に比べて格段に厚い殻を作りあげることができる。

三〇〇〇年を超える貝斧の歴史



巨大なオオシャコガイの中に立つ女の子(1940年代パラオの絵はがきより)

沖縄などではシャコガイのさしみが人気であるが、オセアニアの人びとの食卓にシャコガイのいることはあまりない。むしろ貝殻のほうが古くから好んで使われてきた。その厚くて頑丈な殻は、木を伐ったり削ったりする手斧やナイフの素材として理想的だ。石材のないサンゴ島はもちろんで、火山島でも石斧とともに貝斧を作っていた例が多い。
オセアニアにおけるシャコガイ製手斧の歴史は長く、三〇〇〇年以上前にさかのぼる。発掘に先だつ遺跡

分布調査で見つかる遺物の代表格でもある。シャコガイの表面の波打つ縞文様が残る薄手の貝斧や、オオシャコガイのぶ厚いちようつがいが部でつくった丸のみ型の貝斧など、いずれも家やカヌーを造る基本的工具として使われた。
ミクロネシアの古い写真を見ると、男性は手斧を肩にかけて歩いており、常に手元に携行する大事な道具だったことがわかる。ただし、土器のようには、作られた時代によって形や文様が変化する傾向がないため、いつごろ作られたかを形態特徴から見当をつけられないのが残念である。

ワシントン条約で保護

斧の他にも杵や腕輪、胸飾り、貨幣なども作られ、硬いシャコガイを

ていねいに薄い円盤状に加工した装身具など、その高度な加工技術には目を見張るものがある。
近年では、シャコガイを小さな球状に削ったものが、養殖用真珠の核として利用されている。

一九八五年から、シャコガイ科は全種類がワシントン条約によって「国同士の取引を制限しないと、将来、絶滅の危険性が高くなるおそれがある生き物」として保護されている。貝殻だけでなく加工品でも採取国の許可がなければ持ち出せないの



ソロモン諸島の頭飾り「カブカブ」。シャコ貝を薄い円盤に仕上げた上に鱗甲の装飾が重ねられている(ジョージ・ブラウンコレクションより)



太平洋



上・フィリス島で発掘された1000年前のシャコガイ製貝斧。ていねいに成形し、下辺には鋭い刃がつけられている。下・手斧を肩にかけたパラオの酋長たち。20世紀初頭に撮影された。貝斧は、このような手斧の先につけられた(「東京大学総合研究博物館 標本資料報告」第34号)

いんどう みちこ
印東道子
民博 民族社会研究部
専門はオセアニアの考古学、文化史研究。オセアニアの島々で発掘調査を行い、物質文化の他に人間と自然の関わりに関心がある。